

幽霊船

小川未明

青空文庫

沖^{おき}の方に、光^{ひか}つたものが見^みえます。海^{うみ}の水は、青^{あお}黒^{くろ}いように、ものすごくありました。

そして、このあたりは、北^{ほく}極^{きよく}に近い^{ちか}ので、いつも寒^{さむ}かったのであります。

光^{ひか}つたものは、だんだん岸^{きし}の方に近^{ちか}寄^よってきました。そして、だんだんはつきりとそれがわかるようになりました。それは、氷^{ひようざん}山^{さん}であつたのです。

氷^{ひようざん}山^{さん}はかなり、大^{おお}きく、とがった山^{やま}のように鋭^{すど}く光^{ひか}つたところもあれば、また、幾^い

人^{くにん}も乗^のつて、駈^かけつこをすることができるとの広^{ひろ}々^{びろ}とした平^{へい}面^{めん}もありました。そ

して、海^{うみ}の水^{みづ}の中^{なか}には、どれほど深^{ふか}く根^ねを張^はっているかわからないのでした。氷^{ひようざん}山^{さん}は、

すべて、こうした水^{すい}晶^{しょう}のような氷^{こおり}からできています。それが潮^{しお}の加^か減^{げん}で漂^{ただよ}ってくるの

です。

このあたりの海^{うみ}には、ほとんど、毎^{まい}日^{にち}のごとくこうした氷^{ひようざん}山^{さん}を見^みました。あると

きは、悠^{ゆう}々^{ゆう}として、この大^{おお}きな氷^{こおり}の塊^{かたまり}は、あてもなく流^{なが}れてゆきました。そして、遠^{とお}く

にゆくまで、その光^{ひか}つたいただが、望^{のぞ}まれたのであります。さびしい、入^いり日^ひが、雲^{くも}を

破^{やぶ}つて、その氷^{ひようざん}山^{さん}に反^{はん}射^{しゃ}しています。それは、遠^{とお}く、遠^{とお}くなるまで、岸^{きし}に立^たつて、

ながめている人^{ひと}たちの目^めの中^{なか}に映^{うつ}つたのであります。

また、あるときは、この氷山が、まるで蒸気機関のついている氷の船のように、怖ろしい速力で、目の前を走ってゆくこともありました。しかし、この白い、光る、氷の上には、生きているものの影はまったく見えなかったのです。

ただ、いつのことであつたか、こうした氷山が、岸に近づいてきましたときに、人々は、なんだか黒い小さなものが、氷の上に落ちているのを見ました。

「黒い鳥だろうか？」

「鳥なもんか、海馬か、オットセイだろう。」

岸に立つて、沖の方を見ている人々は、いいました。

しかし、それが、近づいたときには、大きくまであることがわかりました。くまはどうかして、陸に上がりたいと、あせっているようでした。きつと、海の上が真っ白に凍つたとき、くまは氷山の上まで遊びに出たのです。そのうちに、氷山が動きだして、陸との間が離れて、もうふたたび陸の方へ帰れなくなってしまうたのでしよう。みんなは、くまが、陸へ上がってきてはたいへんだと思いました。どんなに、暴れまわるかしのからです。

「おい、みんな気をつけたがいい、くまをこちらに渡してはたいへんだ。」と、口々に

いいました。

それで、鉄砲てつぽうを持ってきたり、槍やりなどを持ってきたりしました。しかし、それまでに、氷山ひょうざんは陸の方りくほうへは近ちかづくに、ふたたび沖の方おきほうへと流ながれていってしまいました。

みんなは、くまが渡わたれなかつたので、安心あんしんをしました。が、そのくまが、それから、どこまで流ながれてゆくだろうと思おもうと、かわいそうな氣きがしました。

こんなようなことのある、北の方きたほうに起おこつたできごとであります。いま、それをお話はなしいたしましょう。

「もう、氷山ひょうざんもこなくなつた。海の上うみうへは、穏おだやかだから、漁りように出かけよう。」というので、三人にんの漁師りようしは、ある日ひのこと、船ふねに乗のつて、沖の方おきほうへこいでゆきました。

三人にんは、沖おきにあつた、一つの島しまに近ちかづきました。その島しまには、だれも住すんでいませんでした。この島しまには小さな湾わんがあつて、よくこの湾わんの中にたくさん魚さかながはいっていることがあります。それで、漁師りようしは、時分じぶんを見みはからつて、この島しまに立たち寄よつては漁りようをします。獲とれるときには驚おどろくほど、獲とれることもありました。

三人にんは、湾わんの中に、船ふねを進すすめてようすをうかがいますと、たくさん魚さかながはいっているけ
はいがしました。

「これは、しめたものだ」

「しめたぞ！」

三人は、勇みたちました。そして、網を下ろして引くと、はたして、こんなに獲れたところがいままでにもなかったほど、たくさん獲れたのであります。これをばみんな船の中にいれたのでは、これから、もつと沖へ出て仕事をするのに邪魔になりましたから、獲れた魚を島の浜辺に上げておいて、帰りに持つてゆこうということにしたのであります。

三人の中の一人は、島に残りました。二人が夜帰つてくるときに、島で火を焚いて合図をしようとしたからでした。乙の男だけは、だれもない島に残つて、甲と丙の二人が、勇ましい掛け声をしながら、湾から沖の方へ出てゆくを見送つていたのであります。

「早く帰つてこいよ。」と、乙は、仲間の二人に向かつて、いいました。

「ああ、おまえがさびしがっているから、じきに引き揚げてくるとも……。」「と、二人は、笑いながら、だんだんと遠ざかったのです。

穏やかな夕暮れでした。乙は、じつと船を見送っていますと、いつしか、青黒い沖の間に隠れて見えなくなつてしまいました。子供のころから、海を畳の上のように思つてい

る人たちでありましたから、この荒々しい海をもおそれてはいませんでした。

日が暮れると風が出てきました。それは、思いがけない突然のことでした。急に、浪が高くなつてほえはじめました。乙は、沖に出ていった二人の友だちの身の上を心配しました。

「どうか無事に、早く、この島まで帰つてきてくれればいい。」と、祈りながら、火を焚いて闇の夜をこいでくる目じるしを造ろうとしました。そのうちに、風雨と変わつて、せっかく燃え上がった火が、幾たびとなく吹き消されたのです。けれど、乙は、熱心に、そのたびに火を新たにつけたのでした。しかし、待ちに待った船は、帰つてきませんでした。

「この暴風に、どこへ逃げただろうか？ こんな広い、広い、海原をどこへゆくというところもないのに……沈んでしまったのではないだろうか？」

乙は、もはや、気が気ではありませんでした。そのうちに、怖ろしい夜は明け放れまして、見渡すかぎり、大空は、ものすごく、大きな浪頭はうねりうねっています。そして、船の影すら見えないのでした。

乙は、独り、小さな無人島に残されたのでした。彼は、一日、岸に立つて、船の帰のを待つていました。しかし、昨日の暴風に難破したものか、船はその日も暮れかつ

たけれど、姿すがたが見えぬのでありました。

三日みつかめのことです。乙おつは、もうやせ衰おとろえていました。やはり海岸かいがんに立たって、いっしんに沖おきの方ほうを見ていますと、なつかしい、見覚えみおぼのある仲間ななかまの乗のっている船ふねが、波なみを切きつて湾わんの中なかへはいってきました。甲こうも丙へいも、無事ぶじで船ふねの上うへに動うごいているのがありありとして見えたのです。

「おうい。」と、乙おつは、両手りょうてを高たかく挙あげて、沖おきに向むかって叫さけびました。すると、あちらからも両手りょうてを高たかく挙あげて、叫さけんでいたようです。けれど、その声こえは、聞きこえませんでし

た。
おりから、入いり日ひの影かげが、波なみの上うへを明あかるく照てらしました。そして、船ふねに乗のっている二人ふたりの顔かおを赤あかく彩いろどって見みせたのです。

「ああ、なつかしい、まさしく甲こうと丙へいだ！ よく死しなずに帰かえってくれた。」と、乙おつは、目めに、熱あつい涙なみだをいっぱい流ながして喜よろこびました。

やがて、その船ふねは、すぐ間近まぢかにまいりました。

「おうい。」と、乙おつはまた両手りょうてを挙あげて叫さけびました。

甲こうと丙へいの二人ふたりは、それに対たいして、答こたえるであらうと思おもったのに、音おとなく、船ふねをこいで、

前方^{ぜんぽう}を横切^{よこぎ}ったかと思うと、その姿^{すがた}は、煙^{けむり}のごとく消^きえてしまったのです。

乙^{おつ}は、びっくりしてしまいました。

「幽霊船^{ゆうれいぶね}だ!」

こういうと、乙^{おつ}は、がっかりとして、自分^{じぶん}の体^{からだ}を砂^{すな}の上に投^なげて泣^なきだしました。彼^{かれ}は、疲^{つか}れた頭^{あたま}に、いろいろの幻影^{げんえい}を見^みました。夜中^{やちゆう}、うなされつづけました。そして、ふたたび、明^{あか}るくなつたときに、彼^{かれ}の目^めは、血走^{ちばし}つて、興^{こう}奮^{ふん}しきっていました。

ちようど、その日^ひの昼過^{ひるす}ぎごろでありました。乙^{おつ}は、顔^{かお}をあげて、沖^{おき}の方^{ほう}を見^みますと、まごう方^{かた}なき、なつかしい船^{ふね}の姿^{すがた}を見^みました。しかも、昨日^{きのう}見^みたと同じ^{おな}い……幽霊船^{ゆうれいぶね}の……こちらへこいでくるのを見^みました。

一時^じは、はつと思^{おも}つて、うれしさに胸^{むね}が躍^{おど}りましたけれど、つぎの瞬^{しゆん}間^{かん}には、気味^{きみ}わる悪^{わる}さで体^{からだ}じゆうがおののきました。

「こいつめ、俺^{おれ}まで、殺^{ころ}す気^きなのか?」と、乙^{おつ}は狂^{くる}いはじめました。

その間^{あいだ}に、船^{ふね}は、ますます近^{ちか}く、波^{なみ}を切^きつて、島^{しま}に近^{ちか}づいてきました。乙^{おつ}は、腰^{こし}にあつたピストルを取^とり出^だしました。そして、船^{ふね}を目^めがけて、つづけさまに火^ひぶたを切^きつたのでした。

しかし、それは、幽霊船でなかったのか、消えなかったのです。船が岸に着くと、二人は、陸へ踊り上がりしました。

「おお、おまえは、気が狂ったのか！」といつて、なおも、暴れ狂う乙をようやくに押さえつけました。

乙は、まったく、気が狂ってしまったのです。あの夜、二人の乗った船は、あちらの陸に暴風のため吹きつけられました。そして、波の静まるのを待つて二人は、島へ仲間を迎えにやってきたのでした。

二人は、気の狂った友だちを船に乗せて、あちらの陸へと帰つてゆきました。それから、二人は、手あつく、哀れな友だちを介抱しましたので、だんだんと気の狂ったのが、もとに戻つて、いつしかなおつてしまいました。それから、三人は、永く仲のいい友だちでありました。

いまだに、この話は、北の港に残っています。無人の小島は、いまでも、青黒い波の間に頭をあらわしています。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1924（大正13）年11月

※表題は底本では、「幽霊船《ゆうれいぶね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幽霊船

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>